

目的 平安朝の時代より、江戸時代まで、わが国の香粧を支配していた木性の香りは、明治以後、主として花性の香りへと移っていった。そして、従来の香りは、いわゆるマッコウくさい香りとして感受されるようになってきた。しかし西欧の気候に花香がよくマッチするように、カビくささとエクトカルペンを主とする磯の香りが基本的な香りといわれているモンスーン気候に属するわが国の環境下では、本来、木性の香りがよくマッチする。このことを明らかにするために、その効果を求めた。

方法 シュルツの自律訓練法を、人工気候室内で行い、その間、香をかがせて被検者のフレナスモグラム、指先の昇温を求めた。気象条件は、もっとも昇温し易い条件を設定した。その設定条件は不快指数にして60～65の範囲とした。瞳孔反射は、自律神経系の安定状況をよく示すのでイリスコーダを用いて、光刺激にともなう縮瞳、それに続く散瞳の状況を求めた。

結果 クスノキの葉を嗅がせた場合、人工気候室内において“手が暖かい”という自律訓練を始め、昇温ならびにフレナスモグラムの脈波幅の増大をみた。安静→自律訓練→休けい→香り吸引→香り吸引下の自律訓練→休けいを行ったところ、指先温は、 28.1°C → 32.5°C → 31.3°C → 30.1°C → 32.3°C → 32.1°C と昇温した。脈波幅もそれに従って増大した。黒方、荷葉などの木性の香りを嗅いだ場合、一定の有意水準で香りと昇温との関連が求められた。香りの吸入により、縮瞳相は減少し、散瞳相は増加する傾向がみられた。